

業務指示に用いられることばが専門職の行動に及ぼす影響

静岡県立大学短期大学部

歯科衛生学科 藤原 愛子

要約；保健指導について歯科医師が指示する項目（内容）を調査し、歯科衛生士の意識形成への影響を考察した。『歯科医師が指示する保健指導項目』は歯科衛生士の経験年数にかかわらず、特に「歯口清掃の方法」と「歯周病の説明と予防」が多く、そのほか3項目にほぼ限定されていた。また、その5項目は、具体的な手技を直接伝える内容に偏っていた。一方、『歯科衛生士が行いたい保健指導項目』は、歯科医師が指示する5項目のうち「義歯の手入れ」を除く4つの項目のほか、歯科医師があまり指示を出さない「歯の大切さ」あるいは「禁煙指導」なども含めて多様であった。しかし、歯科衛生士が行いたい項目への回答にも、経験年数による異なりは認められなかった。歯科衛生士が行いたいと回答した保健指導項目は、手技の伝達およびそれを動機づけるに必要な項目（内容）であった。歯科医師が指示する保健指導項目は、歯科衛生士が専門職として行動する根底に影響していると考えられた。

索引用語；歯科衛生士、歯科医師、保健指導、業務指示

1. はじめに

我々は、平成14年に1県の歯科衛生士会員を対象に調査を行い、歯科衛生士が行っている子どもへの保健指導項目（内容）は、歯の磨き方指導を主体としていて手技の伝達に偏っているという結果を得ている¹⁾。歯磨きは、日に2回以上行う者が48.1%に達しており²⁾、セルフケアの方法として国民に広く浸透して定着している。しかし、学校保健の現状では12歳児の齲蝕罹患率率は67.68%であるなど³⁾、齲蝕は他の疾患に比べて明らかに高い罹患率にある疾患である状況は変化していない。歯磨きは、齲蝕罹患の抑制を目指す重要なセルフケアの1つではあっても、その1手段をもって抑制できるレベルには自ずと限界がある。齲蝕罹患を抑制するには、生活習慣全般にわたる多様なセルフケアが定着しなければならないことは、広く認識されていることである。

歯科衛生士の業務は歯科医師の指示を受けて行われることから、歯科衛生士が「歯の磨き方」を主体に保健指導を行っていた結果には、歯科医師の指示する保健指導内容が影響しているのではないかと考えられる。専門職としての行動を律する意識を形成することは重要な学校教育課題であって具体的な目標を立てて教育が行われている。歯科衛生士に対する歯科医師の指示の内容および指示する言葉が、専門職の行動に与える影響を考察することを目的に、調査を行った。

2. 方法

歯科臨床で働く歯科衛生士を対象に、自記式調査用紙を用いて郵送法による質問調査を実施した。質問は、『歯科医師から指示される保健指導項目のうち上位3項目』、『歯科医師の指示の出し

方上位2つ』および『あなたが行いたい保健指導項目のうち上位3項目』について、それぞれ選択回答を求めた。フェースシートに関わる質問は、卒業年、臨床経験年数、勤務する地域、勤務先のスタッフ構成および年齢（20歳からの5歳刻み）である。

調査対象は、設立母体が国立、県立および歯科医師会立それぞれ1校の、平成11年、12年、13年および14年3月の卒業生のうち、歯科臨床に就職したと考えられる歯科衛生士362名である。

調査は、平成15年8月に実施した。

3. 結果

回収率は、41.7%（151名）であった。

卒業年ごとの回答者数は、平成11年；28名、平成12年；33名、平成13年；34名および平成14年；38名であった。また、回答者の勤務地は、静岡県；43名、島根県；41名、東京都；40名およびその他地域と勤務地を回答しなかった者；16名であった。

経験年数ごとの回答者数は、1年以上2年未満；46名、2年以上3年未満；36名、3年以上4年未満；32名および4年以上5年未満；26名であった。経験年数を回答しなかった者は、9名であった。

『歯科医師が指示する』および『歯科衛生士が行いたい』それぞれ上位3つに選択された項目ごとの回答数は、表1のとおりであった。『歯科医師の指示の仕方上位2つ』に選択された項目ごとの回答数を、表2に示した。表をもとに、図1を表した。『歯科医師が指示する項目3つ』に選択されて回答数が多かった5項目を対象に、『歯科衛生士が行いたい項目3つ』に選択した回答との関係について χ^2 検定を行い、 $p < 0.05$ で有意であった項目を表3にして示した。

『歯科医師が指示する項目』並びに『歯科衛生士が行いたい項目』に選択された項目は、ともに経験年数による差が認められなかった。

3. 考察

現在の社会構造は、健康を支援する専門職の1つとして、歯科衛生士に自立を求めている。歯科衛生士法第13条の3で「歯科衛生士は、歯科保健指導をなすに当たって主治の歯科医師又は医師があるときは、その指示を受けなければならない」と、患者の安全を第一とするために、その自立は専門職間の連携にあることを示して制限している。歯科医師がどのような言葉でどのような業務内容を指示するかは、歯科衛生士の行動を誘導するものであり、法による制限の意義が適切に作用しているかが問われるものである。

本調査結果では、『歯科医師が指示する保健指導の項目』は、どちらかといえば歯口清掃の方法に偏っており、かつ歯周病抑制を意図した指示であると考えられた。歯科医師の指示がほぼ5つの項目に限定されたことは、臨床現場の患者の実態に基づいて歯科医師が判断したニーズを反映するものでもある。しかし、歯科医師が指示する項目に経験年数による差が認められなかったこ

とは、歯科衛生士に対する専門職としての認知の適切性を問うものである。さらに、歯科衛生士自身が『行いたい保健指導項目』に選択した回答にも、経験による差が認められなかった。業務指示や業務内容の選択に経験年数が反映されない保健指導は、誰にでもできる“定型化”したあるいは“指摘”に基づく“指示”になりがちであり、歯科衛生士が行っている保健指導は、患者の自立あるいはQOLの向上を目指した、真にその人を見ておこなう支援行動であるかについて、問われるのではないかと考えられた。

『歯科衛生士が行いたい保健指導項目3つ』に選択された項目は、ほぼ5項目に限定した歯科医師の指示とは異なって分散しており、歯科衛生士は『歯科医師が指示する項目』以外についても指導を行いたいと回答していた。分散した回答であったことに歯科衛生士は自分の考えを有していることが窺われ、そこに専門職としての自立性を認めることができた。すなわち、『歯科衛生士が指導したい項目』は、『歯科医師が指示する項目』が求める保健行動の変容を、より確実に達成するに必要な内容であった。例えば歯周病予防には、歯口の清潔度とともに食事の影響があると考えられている^{4) 5) 6)}が、本調査結果では、「歯周病予防のための指導」を指示される歯科衛生士は「食事指導」を行いたいと回答する傾向が認められた。また、前述したように国民の48%以上が1日に2回以上歯を磨いているが、歯磨き動作を保健行動として定着するには、“何故”、“何を目的に”磨くのか動機が形成されていることが必要であり、“歯は自分の生活にとって大切なものである”という意識形成が図られなければならない。本調査では、「歯周病予防のための指導」を指示される歯科衛生士には、「歯の大切さ」および「歯口清掃の意義」並びに「歯口清掃の方法」を指導したい項目として選ぶ傾向が認められていた。一方で、それらは“指導したい”項目であって、あまり実行に移していないことを示唆している。

歯科衛生士が「歯口清掃の方法」を選択した回答数が、歯科医師ほどの多数でなかった点は特徴的である。『歯科医師からよく受ける指示の仕方上位2つ』への回答は表2の通りであったが、「歯ブラシして」が125名(43.1%)であって、2番目に多かった「歯周病の説明をして」への回答数55名(19.0%)に比べて、倍以上であるほどに多数であった。このような指示の出し方が、歯科衛生士が歯の磨き方という手技の伝達に偏って保健指導を行っていた現状¹⁾をもたらした、ひとつの誘因ではないかと考えられた。

本調査結果では、歯科衛生士は、自立性をもって業務内容を考えている面が認められた。しかし、実際の保健指導業務行動は歯科医師の指示次第であって、歯科衛生士が選択した動機付けを促す項目は実際に行う指導内容に反映されていないと考えられ、歯科医師と歯科衛生士の連携について問題を提起するものであった。業務指示に用いられる言葉の影響の大きさを示す結果であった。

本研究の一部は、第 45 回日本歯科医療管理学会で発表し、同学会雑誌第 39 巻 3 号に掲載する予定である。

参考文献；

- 1) 藤原愛子、遠藤圭子；歯科衛生士が行っている歯科保健指導の実態調査、静岡県立大学短期大学部研究紀要 16 号、161-169、2002
- 2) 厚生省健康政策局「平成 11 年歯科疾患実態調査報告」、財団法人口腔保健協会、32、2001
- 3) 平成 15 年学校保健統計調査速報
- 4) 阪本 尚ら；吹田市における小・中学生の生活習慣とう蝕・歯肉炎の関係、小児歯科学雑誌、39(2)、382、2001
- 5) Nishida M, Grossi SG, Dunford RG, et al. Role of dietary calcium and the risk for periodontal disease. J Periodontal 1999. [Submitted]
- 6) Rubinoff AB, Latner PA, Pasut LA. Vitamin C and oral health. J Canadian Dent Assoc 1989;55:705-707

表1 指示を受ける項目並びに行いたい項目
上位3つに選んだ人数

項目	歯科医師の指示	DHとして行いたい
歯の大切さ	19	54
歯口清掃の意義	54	58
歯口清掃の方法	135	57
インフォームドコンセント	28	34
齲蝕の説明	49	43
歯周病の説明	104	96
義歯の手入れ、扱い方	38	4
食事指導	3	23
摂食嚥下指導	0	12
在宅患者のケア	2	20
禁煙指導	5	23
筋機能訓練	0	9

図1

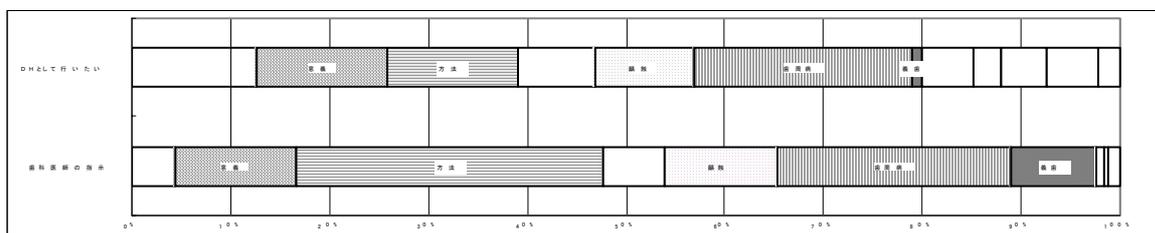


表2 保健指導を指示することば

* ; p<0.05

指示することば	回答数
指導して	52
歯ブラシして	125
食生活を指導して	2
おやつの指導して	1
むし歯について教えて	9 *
フッ素の説明をして	9
歯周病の説明をして	55 *
入れ歯の取り扱い方を説明して	29 *
食べ方を説明して	2
禁煙指導して	2
治すように言って	4

表3 指示されると30名以上が回答した項目と行いたい項目の関係
 および有意性が認められた項目のp値($p < 0.005$)

	歯口清掃の方法 p値	歯周病の説明 p値	歯口清掃の意義 p値	齲蝕の説明 p値	義歯の手入れ p値
歯口清掃の方法	0.002	0.001	N. S	0.027	有意差が 認められた項目 なし N. S
歯口清掃の意義	0.001	0.003	0.000	0.000	
歯周病の説明	0.000	0.000	0.009	0.000	
齲蝕の説明	0.001	0.007	N. S	0.000	
歯を大切に	0.000	0.002	0.008	N. S	
食事指導	0.002	0.000	0.001	N. S	
インフォームドコンセント	0.001	N. S	N. S	N. S	
機能訓練	N. S	N. S	0.001	N. S	
義歯の手入れ	N. S	N. S	N. S	N. S	